

## 特集 くらしに寄りそった情報伝達とは

04

わかりやすさを生む、支援する、スローコミュニケーションの取り組み  
 …知的障害者のニーズに即した情報伝達を目指して

小田 巻友子（立命館大学経済学部 准教授）



ニュースの編集作業風景  
 （出所）スローコミュニケーション提供。

## はじめに

2013年の障害者総合支援法、2016年の障害者差別解消法の施行を受けて、障害者の社会参加や就労を促し、当事者の意思が適切に反映された生活が送れるように支援することが一層謳われるようになった。しかし、障害者の社会参加や就労を進めるためには、彼らに必要な情報をわかりやすい形で届けなければならない。当事者の自己選択や自己決定は、必要な情報保障があってこそ成り立つものである。そのような考えの下、知的障害者向けのわかりやすい情報を発信することを目的として、知的障害にかかわるさまざまな支援者や研究者が集まり、2016年に一般社団法人スローコミュニケーション（以下、スローコミュニケーションと記す）が設立された。スローコミュニケーションの活動内容は、わかりやすいニュースの配信のほか、企業や官公庁・福祉事業所などの文書をわかりやすくする支援、知的障害者向けに情報発信する場合の提案や助言、知的障害者を理解するための啓発事業、知的障害者が自分たちのくらしや支援、虐待防止、将来のことを考えるワークショップの企画・運営など多岐にわたっている。

本稿では、スローコミュニケーションの設立にかかわった役員1名へのインタビューに基づき、スローコミュニケーションの取り組みを紹介する。そして、知的障害者だけでなく、わかりづらさに悩む人たちへの情報保障を行う上でのヒントをつかむとともに、わかりづらさをどのように乗り越えていくかについて考察していく。

『ステージ』の創刊から  
スローコミュニケーション設立へ

スローコミュニケーションの前身と言えるのが、知的障害者にとってわかりやすい新聞をつくらうとして始まった『ステージ』の発刊である。

知的障害者の親の会である「社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会」(以下、育成会)が主体となり、1990 年代から知的障害者の権利擁護運動が進められた。その流れの中で、育成会において本人部会が結成された。同時期に、スウェーデンで、障害者や移民など言語上のハードルがある人向けにわかりやすくニュースを届ける、『8 SIDER』と呼ばれる新聞が日常的に発刊されているという情報が入ってきた。そこで、誰もがわかりやすい新聞をつくらうと、本人部会のメンバー及び当時毎日新聞記者であったスローコミュニケーション代表の野澤和弘氏を中心となり、1996 年に創刊されたのが『ステージ』である。このステージという名称には、社会的に光があたることがなかなかない人たちが主役を演じ、次の段階へ進むために一休みする場所という意味が込められている。

ステージでは、編集段階から知的障害のある当事者がかかわっていた。そのため、どのような表現が当事者にとってわかりづらいのか、どのような言葉が知られていないのかといったノウハウが次第に蓄積されていった。その蓄積の中で、ステージでは、文章的な平易さと、視覚的なわかりやすさの両方を追求しながら原稿を作ってきた経緯がある。具体的には、1 文は 30 字以内を目安とする、四字熟語を使用しない、カタカナ語・アルファベットの略称は間違いがおこらないように気を付ける、といった経験則的なルールが見いだされていった。また、読み手の視線の移動にも気を配り、文章を途中で区切ることで意味をとりやすくするなどの工夫をしている。

もちろん、新聞各社が発行している「子ども新聞」などといった、フリガナがふられた読みやすい子ども向けの媒体は既に存在している。しかし、それらは大人の知的

障害者が欲しているニーズに合致した情報源ではない。30 歳の知的障害者であれば、たとえ、言語的な理解が年相応でなかったとしても、大人としての興味や関心事があり、自らの生活にかかわる情報を欲しているのである。このように、大人の知的障害者にとって必要な情報が当事者に適した形で提供されていないという社会課題から生まれてきたのが『ステージ』であった。

しかし、母体であった育成会が 2014 年に社会福祉法人の事業を停止したことにより、ステージも事業を停止することとなった。そして、2016 年に有志とステージにかかわっていた知的障害者らで、同様の媒体を作りたいという思いから、一般社団法人スローコミュニケーションを設立した。スローコミュニケーションの活動の担い手としては、法人の役員 5 名、ステージ発刊時からかかわっている知的障害者ら、毎週ニュースを作ってくれている若手のボランティア団体である。



写真 1 ステージの紙面  
(出所) スローコミュニケーション提供。

## わかりやすい媒体をつくり、 わかりやすさを支援する活動

スローコミュニケーションの活動は大きく分けて 2 つある。1 つ目はわかりやすい

媒体を普及する活動である。スローコミュニケーションでは、週1回のニュースやコラム記事等を配信している。ニュースの作成にあたっては、まずボランティア団体が原稿を作成する。次に、スローコミュニケーションの構成員である役員や知的障害のある当事者が原稿に目を通し、コメントをつける。最後に、原稿に音声をあてるボランティアが加わり、ニュースが配信される。ニュースは、スローコミュニケーションのウェブサイトのほかに、専用のアプリでも閲覧することができる。

スローコミュニケーションでは、そのほかにも、公的機関や福祉事業所から依頼を受けてわかりやすいパンフレットなどを作成している。

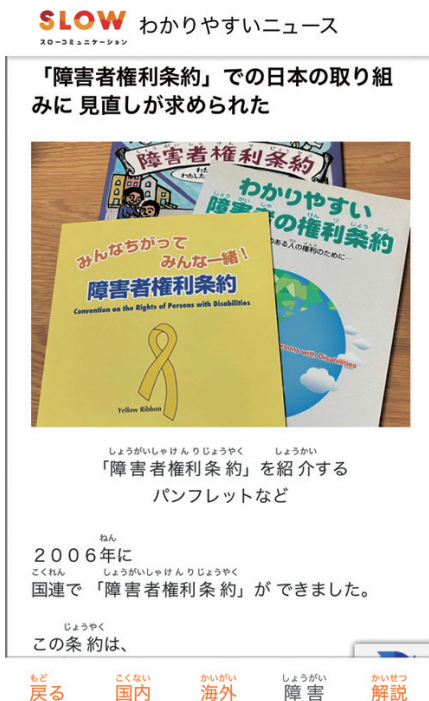


写真2 アプリを使用した場合のニュース画面  
(出所) スローコミュニケーション提供。

2つ目は、わかりやすさをつくる人を支援する活動である。具体的には、公的機関

や民間事業者からの依頼に応じて、講演やワークショップを通してわかりやすいものをつくるノウハウを提供している。あるいは、既に作成された文書にたいして、わかりやすくするための助言をするといった、後方支援を行っている。

この後方支援のベースになっているのが、これまでの研究および実践に基づいてスローコミュニケーションによりまとめられた、『『わかりやすさ』をつくる13のポイント』という冊子である(写真3)。



写真3 『『わかりやすさ』をつくる13のポイント』  
(出所) スローコミュニケーション提供。

さらに、わかりやすい文章を書く際のツールとして活用できるのが、スローコミュニケーションのウェブサイトで公開している「言い換え検索」である。文章をいれると、知的障害者が聞いたり、目にしたりするときに意味がとりづらい言葉を赤色でピックアップし、言い換え例を提示してくれる。また、文章内の漢字の使用率をカウントし、長文はオレンジ色で強調することで、わかりやすく修正するヒントを提示してくれる(図1)。

図 1 言い換え検索の使用例

政府は、自営業やフリーランスの人向けに、現金を受け取ることのできる制度の創設に向けて検討に入った。

政府は、**自営業**や**フリーランス**の人向けに、現金を受け取ることのできる制度の**創設**に向けて**検討**に入った。

背景がオレンジ色の文は長すぎるようです。ひとつの文に対し 30 文字以内が、望ましいです。  
赤色の言葉は難しい言葉です。言い換え例を参考に言い換えてみましょう。

言い換えを検索する

---

言い換え詳細

---

漢字使用率

文章内の漢字使用率は **39%** です。漢字使用率は 30% 以内が望ましいです。

| 難解語    | 難易度  | よみがな   | 言い換え例・アドバイス                 |
|--------|------|--------|-----------------------------|
| 検討     | ★★☆☆ | けんとう   | (どうするか) 考える ▲               |
| 自営業    | ★★☆☆ | じえいぎょう | (会社などに 入らないで) 個人で 仕事をしている ▲ |
| 創設     | ★★☆☆ | そうせつ   | 新しく作り出す ▲                   |
| フリーランス | ★★★★ | ふりーらんす | 会社に入らないで 仕事をする人 ▲           |

(出所) スローコミュニケーションウェブサイト。

## 活動に対する認知の広がり と公的機関との協働

スローコミュニケーションの配信するニュースは、記事によっては 1000 を超える閲覧がある。ニュースについては、スローコミュニケーションウェブサイトのトップページや SNS での告知、法人役員が講師を務める講演会や研修会での紹介など、積極的な広報も行っている。また、支援者を通じて、あるいは当事者自身で探して、スローコミュニケーションのニュースにたどり着く場合があるという。加えて、特別支援学校で教材として使用されたり、ニュースを印刷して掲示したりする事業所があるなど、スローコミュニケーションの活動に対する認知は教育・社会福祉の現場で徐々

に広がっている。

一方で、スローコミュニケーションは、各自治体との協働も行っている。とくに横浜市とは、スローコミュニケーション設立後に、障害福祉サービス情報のわかりやすさに関する共同研究を進めてきた。その後も、同市のわかりやすい情報媒体の作成の一部を担った。横浜市は外国にルーツのある人が非常に多く暮らす都市であり、市として外国人向けの「やさしい日本語」による情報提供にも積極的に取り組んでいる。そのような背景もあり、障害福祉領域の枠を超えた情報提供も多くなされている。その一例として、スローコミュニケーションでは横浜市 DV 相談支援センター案内チラシのわかりやすい版等を受託作成している。その他の自治体とも、スローコミュニ

ケーションは、わかりやすい情報媒体を協働で作成してきた。これらの背景としては、2016 年 4 月に障害者差別解消法が施行され、公的機関や民間事業者に対して合理的配慮の提供が求められるようになったことが挙げられる。

また、2019 年の読書バリアフリー法や 2022 年の障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法の施行も相まって、公的機関の 1 つでもある図書館では、従来の視覚や聴覚障害に特化したサービスだけでなく、知的障害者向けのサービスとしての、わかりやすい利用案内の作成や読みやすい本の配架、コミュニケーションボードを利用した窓口対応、音声に連動してテキストがハイライトされるマルチメディアデージー図書<sup>1</sup>の活用などが挙げられる。スローコミュニケーションは、図書館のこれらの展開に応じて、助言やワークショップ等を開催することもある。

知的障害者にとって読みやすい本としては、スウェーデンが発祥の LL ブックの導入が進められている。LL ブックとは、知的障害や自閉症等により文字を読むことに困難がある人でも、興味をもって楽しめるわかりやすい本のことである。LL はスウェーデン語の lättläst の略で、「やさしく読みやすい」を意味している。2017 年に出版された写真版 LL ブックである『はつ恋』では、表情がわかりやすい写真とピクトグラフが用いられ、恋愛ストーリーを楽しめる構成になっている(藤澤,「LL ブックについて」)。スローコミュニケーションでも、2021 年に一人暮らしやグループホームで生活を始める人に向けて『ひとりだち』というタイトルの LL ブックを執筆している。生活や仕事、お金のことなど自らにか

かわる物事についてイラストを使い、視覚的にわかりやすいように説明をしている点が特徴である。

図2 LL ブック『はつ恋』



(出所) 藤澤,「LL ブックについて」。



写真4 LL ブック『ひとりだち』

(出所) スローコミュニケーション提供。

## 知的障害者の意思決定を引き出すために

障害当事者に合わせた方法での情報伝達は、当事者の意思決定を促す第一歩である。それでは、スローコミュニケーションの活動は、当事者による意思決定を促す上でどのように寄与していると解釈できるだろうか。

第一に、障害特性に合わせた方法での情報伝達により、当事者が身の回りの出来事について関心をもったり、提供された情報を将来の意思決定に役立てたりすることが挙げられる。たとえば、知的障害者の中には、選挙について理解しないまま 18 歳を迎える人もいる。そのような場合、スローコミュニケーションの記事を通じて選挙権の行使の仕方について学ぶことで、自らの意思を実現して活動していくことに役立てることができる。

第二に、一般就労の場で障害のある人とない人の間のコミュニケーションを促進することが挙げられる。知的障害者は、世の中にある多くの情報をそのままの形では受け取りづらい。そのため、例えば職場で周囲の人が話題にしていることが理解できなかったり、コミュニケーションをとろうとしても皆の話の輪に入りづらかったりする場合がある。スローコミュニケーションのニュースやコラムなどの記事は、世の中にある情報を知的障害者に受け取りやすい形に変更したものである。それらを、就労をはじめとしたさまざまな場で活用してもらうことにより、人と人とのコミュニケーションをとりもつことが可能となる。

第三に、各種の記入用紙をわかりやすくすることを支援することにより、当事者の意思を反映した支援体制を実現できることが挙げられる。自治体や福祉事業所の障害者にかかわる申請書類の多くは、代理記入

が認められている。しかし、これらの書類をわかりやすく変更することにより、本人もその書類が自らにかかわる書類だと気づくことができる。たとえば、事業所の契約書類であれば、従来家族が中身について詳細な説明を受けて決定をし、本人は書類にサインするだけということもあった。しかし、わかりやすい説明書を使って、本人に一つ一つ丁寧に説明することで、自分はこうしたい、このような支援を受けたいという本人の意思をこれまで以上に反映することができるようになる。そのような意味で、スローコミュニケーションの活動は、本人の意思をできる限り反映しながらの当事者・家族・職員の共同決定を助けるものであるといえる。

## おわりに

この春、バスに乗車できない女性に出会った。なかなかバス停から発車しないバスの車内でふと外をみると、女性が乗車口付近にずっと立っていた。さっと一人の乗客が進み出て女性に声をかけながら手を出すと、女性はその乗客の手をとって乗車した。そこで初めて、この女性はバスに乗りたかったのだと私は気づかされた。別の日も同じようになかなか乗車しない女性に対して、私は車内から「乗りますか？」と声をかけた。返答はなく、周囲も発車できないバスにざわつき始めた。諦めかけたその時、おもむろに手を出してみると、女性は私の手をとって乗車した。やはり女性はバスに乗りたかったのだと私は確信した。観察してみると、女性は毎回車内の決まった場所に立ち、決まったバス停で障害者手帳をかざして降りていく。その日からは同じようなやり取りが繰り返された。時折、私

以外の乗客や運転手が声をかけて女性が乗車することもあった。

早朝のバスには登校や出社を控えた乗客が多く、発車しないバスや女性へのフラストレーションが見え隠れした。女性は乗車時の段差が怖いのかもしれない、誰かに手助けされることがルーティーンとなっていて乗車できないのかもしれない。しかし、女性は一言も言葉を発しない。知的障害の場合は、当事者が自らのニーズや困りごとを言葉で表現するのが難しいという特徴をもつ。そのため、両者の間にコミュニケーションが成立しない場合、知的障害者はますます遠い存在になっていく。

本来、コミュニケーションとは自ら相手に歩み寄ることではないだろうか。相手がこちらの意図を理解していないと決めつけるのではなく、まずは自らの伝え方に問題はないか、相手は何らかの意志表示をしないかよく観察してみることが重要である。

スローコミュニケーションはこうした知的障害のある人とない人たちの間に橋をかける活動を展開している。わたしたちはお互いにわかりづらい存在だという事実を受け止めて、わかりづらさを取り除く工夫をこらすべきである。それは障害者だけでなく、外国にルーツを持つ人や子どもや高齢者など、わかりづらさに悩む人たちを含めた共生社会の第一歩となるはずだ。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、一般社団法人スローコミュニケーション副理事長の打浪文子氏にインタビューのご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## (参考文献)

スローコミュニケーション, <https://slow-communication.jp/>, 参照日: 2022 年 11 月

20 日。

藤澤和子「LLブックについて」『樹村房』  
<https://jusunbo.co.jp/llbook/#03>, 参照日:2022 年 11 月 15 日。

星野敏康 (2016)「そもそもデイジーって?」『ノーマライゼーション: 障害者の福祉』日本障害者リハビリテーション協会, 36(1), pp.44-46。

## 注

- 1 音声とテキストだけでなく、図表や数式までシンクロさせることにより、視覚障害者だけでなく、文字を読むことに困難を抱える人たちを支援することができる「マルチメディアデイジー」の導入がすすめられている。アメリカや北欧では国家的な予算によりデイジー図書が整備され、教育分野で広く活用されている(星野, 2016, p.45)。